

九州大学病院における口腔顔面痛疾患の特性と重篤な合併症に配慮した星状神経節ブロックに関する検討

大島, 優

<https://doi.org/10.15017/4060085>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (歯学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 大島 優

論 文 名 : 九州大学病院における口腔顔面痛疾患の特性と重篤な合併症に配慮した
星状神経節ブロックに関する検討

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

九州大学病院歯科麻酔科外来には、口腔領域の慢性疼痛患者が院内外から受診する。患者には薬物療法、光線療法、神経ブロック療法など非歯原性疼痛を対象とした治療を提供している。今回、九州大学病院における口腔顔面痛疾患の現状の把握と個々の症例毎の経緯と実際の治療法について検討した。さらに、侵襲的治療である星状神経節ブロックを安全に施行するために、エコーガイドの有用性を検討した。

口腔顔面痛疾患と治療法について検討するために、2013年9月から2015年9月の期間に九州大学病院歯科麻酔科外来を受診した口腔顔面痛疾患患者を対象とし、電子カルテ記録から情報を抽出した。対象患者は195人(男性/女性 60/135)で、平均年齢は47.1±18.2歳であった。口腔顔面痛疾患患者は女性と中高年に多い傾向を認めた。診断名は神経障害性疼痛が141人で最も多かった。その原因としては外科手術が81人(この内46人が外科矯正手術後)で多かった。このような患者を中心に重篤な合併症の報告のある星状神経節ブロックが43人に施行されていた。

合併症を回避するために安全な手技の確立が必要だと考えられたため、超音波装置を用いたエコーガイド下での星状神経節ブロックの有用性を検討した。対象は2013年9月から2017年12月の期間に星状神経節ブロックを施行した患者で、電子カルテより情報を抽出し評価した。抽出した内容は患者の年齢、性別、手技実施の左右、エコーガイドの有無とした。評価項目は星状神経節ブロックの効果判定、随伴症状、合併症、注射針の位置と局所麻酔薬の拡散範囲とした。

エコーガイドなしのBlind-SGB群が79人、エコーガイドを行ったUS-SGB群が69人であった。各群の患者背景に有意差は認めなかった。US-SGB群の内、頸長筋下に局所麻酔薬が注入できたULC群が48人、頸長筋下に局所麻酔薬が注入できなかったnon-ULC群が21人であった。SGBの効果発現はどちらのSGB群でも80%以上の患者で得られ、有意差は認めなかった(Blind-SGB群83.5%, US-SGB群82.6%, $p=0.87$)。本検討で最も多かった合併症は嘔声であった。他の合併症は数が少なく、有意差を認めなかったが、嘔声を認めた患者は有意にUS-SGB群で少なかった(Blind-SGB群27.8%, US-SGB群11.6%, $p=0.014$)。さらにUS-SGB群の中で、ULC群で有意に少なかった(ULC群2.1%, non-ULC群33.3%, $p<0.001$)。これにより合併症の減少には、エコーガイド下でSGBを施行し、頸長筋下に局所麻酔薬を注入することが重要であることが示唆された。